

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる

聖（ひじり）の定着について

伊 藤 唯 眞

一

現在の淨土宗の寺院配置がきまつたのは、戰國の動亂がつづく天文（一五三二）から徳川幕藩體制の基礎が確立する寛永（一六二四）頃までの約一世紀の間、とりわけ織豊による國內統一が進む天正（一五七三）から寛永までの七〇年間においてであつた。⁽¹⁾すなわち淨土宗は時代の過渡期たる十六・七世紀、つまり中・近世の交を中心に着しい發展をみたわけであるが、この時期こそ現在の教團と直結している近世淨土宗教團の形成期として重視されるのである。

中世淨土宗教團は、ひじりの勸化僧を中心に、特定の都市寺院を除けば主として村落の佛堂・寺庵を基盤として展開した教化者教團として性格づけられ、江戸時代のそれは、前代に淨土宗寺院化した無名群小寺院を底邊として頂點に本山をもつ、法的に規制された巨大な制度化教團として把握されるが、戰國末期から江戸初期にかけてのこの形成期には、教化者教團から制度化教團へ移行するにともなつて生ずる

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖（ひじり）の定着について

種々の問題が内抱されている。例えば教化者教團の擔い手であつた遊行的勸化僧の淨土宗寺院の新造立や堂庵の淨土宗化への關與、遊行勸化僧の淨土宗寺院への定住などの問題がある。

筆者はさきに、近江における淨土宗の展開を論じたことがあるが、⁽²⁾その際この教團形成期の諸問題に言及し、特に寺院の開創者と成立契機に觸れ、開創者のタイプに蓮社號・譽號をもつた淨土宗侶、道號だけの平僧や道心者、または阿彌號をもつた民間僧などがあり、彼らが領主・土豪・有力武士・農民の援助によつて新たに淨土宗寺院を造立したり、宗派色の定かでない在地の佛堂・寺庵や荒廢衰退した他宗寺院を淨土宗寺院化していることなどを指摘した。この時資料として用いたのは『蓮門精舍舊詞』（以下、舊詞と略稱）であつたが、例證が近江に限られ、しかも近江寺院の寺傳の書き上げ方が比較的簡單な方なので、遊行的念佛聖としての開創者とその事蹟について特に立ち入つて述べることはしなかつた。

しかし『舊詞』を近江に限らずひろく他國にも目を通すと、漂泊の

念佛聖が堂庵に掛錫したり、あるいは寺院を造立して、次第にそれらの寺庵へ定着していく所傳が少なからず擧げられているので、右にのべたような遊行勸化僧の淨土宗寺院造立とそれへの定住の問題を考へる上に、『舊詞』の傳承はこれを有力な資料として提供することができ、『舊詞』の傳承資料については傍證文獻の存在が期待しえず、民間寺院の傳承資料はどこまでいつても傳承としての性格を拂拭するわけにはいかないが、その尨大な傳承の集積は動かし難い歴史事實の反映と考えられるので、數多くの傳承資料が語りかけてくる一定の傾向性についてはその歴史性を認めてよいであらう。『舊詞』の史料性については既に論じられている。⁽⁴⁾

そこで今度もまた『舊詞』の傳承を中心に、先きの考察では言及しなかつた漂泊、廻國の念佛教化者を近世淨土宗教團形成期の中で追究してみたい。

二

まず回國遊行の勸化者が民間淨土宗寺院の成立にどのように關與しているかを、『舊詞』の所傳にしたがつていくつかに分類してみよう。回國・止住というとに重點を置くと、A行脚―止住―行脚、B行脚―定着の型に二大別でき、さらにA・Bとも止住又は定着の寺庵について (イ)既存の佛堂・寺庵と、(ロ)新造寺庵(新に庵を結びこれを寺)の場合とがある。即ち (一)回國の途中、既存の堂庵に止住してこれを淨土宗化し、再びここを立去る(A―イ)、(二)回國の途上、有縁の土地で村人などの援助を受けて新たに淨土宗寺庵を造立し、しばらく居住し

てから再び行脚に出る(A―ロ)、(三)既存の堂庵に行脚の足を洗ひ、ここに永年留まるか、あるいは歿するまで定住する(B―イ)、(四)縁あつて新造の寺庵に永年留まるか、歿するまでここに定着する(B―ロ)などの場合がある。そしてA―イとB―イの場合の僧は大體において中興開山とされ(淨土宗として再出發したことか)、A―ロとB―ロの僧には開山の地位が與えられるのが常である。勿論すべてがこの四分類のいずれかに該當するとは限らず、判然となしえないものもあるが大體において右のように分けられる。では具體的に寺傳をみてみよう。

(1) 專稱寺(讃岐國塩飽島笠島浦)

開基者建永二年三月二十六日、當嶋之地頭駿河權守高階保遠入道西忍館江元祖法然上人御着被遊、保遠歸依不淺上人暫御逗留之處庵室令起立、依之、保遠館之前有此寺、其後及大破候處、天正六年德譽道泉法師申僧無何國共來令再興、德譽道泉法師、以爲中興開山、其後修行出再不歸寺(下略) (第三六冊)

これはA―イ型の一例であつて、專稱寺は法然配流の地に緣因をもつ寺院であるが、傳承によれば天正六年に德譽道泉なるものが、どこからともなく現われ、大破した寺を中興し、さらに修行の旅に出て再び歸らなかつたという。

(2) 昭專寺(越後國魚沼郡小千谷村)

開山現蓮社日譽上人、開基天正二年之頃、從關東令行脚當地之鎮守日光大明神之於宮所施設法教化、依之、他門之道俗男女靡化風、剽近里淨土之門葉依無之幸一寺令建立、然而後極於隨緣攝化之旨遂暫住、既遍歷修行之身成畢故遷化之日限不正、勿論開山一代之記錄等

行年不知(第二八冊)

この所傳はA—ロ型に屬する。昭專寺は天正二年現蓮社日譽上人によつて開かれたが、日譽上人は關東から越後まで行脚し、ここ小千谷村の鎮守社頭で教化したところ、村人の歸依を愛け、一寺を建立せしめ暫らく住していたが、再び遍歴修行の身となつたので、寺としても遷化の年月や一代の記録は不明であるという。

(3) 長福寺(大和國添上郡那都)

當寺者聖武皇帝天平年中之草創也、爾後廢絕而經年月、已上傳聞、然慶譽了把中興而爲淨土宗之寺也、了把姓氏者淺井氏生國江州淺井郡、幼少而成出家(中略)盛年之頃編歷四國及三度、其後於大和國六條締草庵而居十餘年、從其於奈良佐保川邊中興當寺、興□不斷念佛勇猛相勸三千日也、於其間而奇瑞不少(中略)了把遷化者於命終十年前寬永六年六月廿三日蒙弘法大師之告夢預知死後、寬永十五年三月廿一日正午時五十五歲而向面西方誦廻向文合掌結坐速遂住(往々生脱)具、如新選住生僧傳、起立元和年中了把大德初起而念佛修行之道場也(第六冊)

長福寺は慶譽了把によつて中興された寺である。中興者の了把は、元和から寛永十五年まで長福寺に住して死を迎えたが、彼は四國を編歷すること三度、十餘年間草庵生活を送つてから長福寺を中興したが、不斷念佛を勇猛に勤め、十年も前から死期を知つていた。了把の生涯はまさしくひじりのそれであつた。この所傳はB—イの例である。

(4) 專念寺(豊後國大分郡臼杵領佐柳村)

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖(ひじり)の定着について

開山法蓮社雲譽上人了產和尚生者予州人也、六十六部之修行回國而慶長六辛丑來此地、當所之人等願之佐柳村令住居依專念寺建立、雲譽慶長六辛丑年ヨリ寛永九申年迄三十二年住職也(下略)(第四十冊)これはB—ロの例である。六十六部の回國聖了產は佐柳村の人々の願により、新造立の專念寺に入つて、定住すること三十二年、ついに當寺で歿したが、彼は伊豫國の出であつた。

これらはそれぞれの型の例證として掲げたものであるが、同様な例は他にも多く擧げることができる。「A—イ」豊後國日田郡羽田村常福寺開山の念佐(證蓮社誠譽)は寛永六年回國のため越前國から當地に來留し、阿彌陀堂を淨土宗寺院にして淨福寺と號し、この寺に六年間住職していたが、再び越前國へ還つたという(第四十冊)。また阿波國海部郡完喰浦長福寺の開山日快は、天正年中堺からやつてきて、念佛弘通の本意を遂げるや、また堺へ歸つたというが、『舊詞』には

(5) 長福寺(阿波國海部郡完喰浦)

天正年中之頃堺浦ヨリ日快上人ト申勸化弘通之沙門回國シテ、當浦彌陀堂ニ止住シテ四十八夜別時念佛等ヲ勤行シ、彌陀悲願之趣キ殊勝ニ勸進有、此根源當浦者眞言所被之機ニ而此一宗繁茂ニ而此一宗繁茂ニ而本願念佛之興業無カリキ、日快上人之勸化ニヨリテ念佛歸依之檀越過半タリ、依之淨土宗相續仕候、然而彼上人弘通建立之本意ヲ遂ケ、其已後堺浦エ歸ラレ、有緣之檀越信心増進之爲ニトテ、大日本國二三體之靈像御長二尺五寸餘之立像箇生之彌陀如來於當浦之檀越而贈與給エリ、今尚堂寺之本尊是也(第三六冊)(當カ)

と當時の傳承が載せてある。「A—ロ」武藏國荏原郡三田寺町願海寺

の開山尋西（證蓮社誠譽）は、修學ののち諸國を遍歴し、安藝廣島に般舟寺を建て、のちこれを弟子に付嘱し、また關東に下向して願海寺を創建したという（第十九冊）。また豊後國海部郡白杵村龍原寺の開山路廓（發蓮社圓譽）は、關東から豊後に下向した僧であり、龍原寺のほかには福良村稱名寺、毛井村龍泉寺、廣原村龍昌寺を造立し、のち再び關東に向い、途中山城伏見にも龍原寺を開き、さらに江戸八丁堀に龍源寺を起立した。白杵龍原寺、伏見龍原寺、江戸龍源寺とも路廓の歿年についての所傳は一致している。信濃國河内島上田領内水鉾村境福寺の開山となつた闇公（崇蓮社善譽）は、「此僧以爲道者故令回國、當國詣善光寺」つて小庵を立てこれを寺院としたが、「三十餘年之後他山不知」という具合であつた（第二六冊）。

〔B―I〕豊後國海邊郡佐賀關回向院の開山源歴（信蓮社深譽）は武藏の人であり、「爲回國來干此所」た折、無住であつた正念寺に寛永九年から十三年間住職し、正保元年から回向院に隱居した（第四一冊）越中國富山西養寺の中興開山たる順如は、立山參詣の時砺波郡にある荒廢した寺を復興、これを西養寺と號し、慶長六年所替によつて富山に移つたが、應安六年に歿するまで定住したという（第四二冊）。また周防國熊毛郡三輪村淨國寺の開祖たる光譽上人は、天文年中に十一面觀音の靈地に掛錫し、受戒念佛を弘めて一字を建てるに至つたが、これが淨國寺であると傳えている（第二七冊）。〔B―ロ〕豊後國速見郡龜川村の信行寺開山一故和尚（誠蓮社深譽）はこの村に「下着」して一字を造立し、慶長九年まで四年間住職して、當寺に歿したという（第四十冊）。同國大分郡生石村淨土寺の開山覺了（圓蓮社滿譽）は遠江國か

ら行脚し來たり、明應九年毛井村に「下着」し、淨土寺を立て一年間滯留したが、翌文龜元年生石村に來て淨土寺を開き、大永六年まで二十六年間定住した（第四十冊）。會津若松の秀翁寺の開山良善（選蓮社）は、越後の下田から遍歴の旅に出て、慶長三年若松にて秀翁寺を構え、奉持してきた善光寺佛を安置し、居ること十三年にして慶長十五年に寂したという（第四八冊）が、この良善は善光寺聖とみられる。

次に、ひじりの教化僧が古跡に庵を結び、これを淨土宗寺院化し定着していく典型を掲げておこう。

(6) 西方寺（河内國石川郡富田林）

當寺起立之由來、光譽長山（中興開山寂蓮社光譽上人長山和尚、姓氏生國并剃髮付法之師修學之標林等分明不知）遍歴諸國時年四十有餘詣紀州高野山歸期偶宿當處、粵絕境勝他星霜年舊社在焉、求處之者問其事跡一人々答曰、傳聞此處佛法最初聖德太子時之寺、中古因三大地震一破廢、於是光譽頻發三繼斷之志三料村民乃締小庵於社前蓮池之畔、不遑求佛像偏向西方、稱名念佛、無分晝夜、積年之遂蓮池夜々放光、光譽信於心三不敢語、人或夜夢珠勝佛像來告曰、吾在此池待汝日淹汝何不迎、夢覺隨喜任告探池中一果得佛像、拜聖德太子正作阿彌陀佛尊像也、長三尺光譽感淚沾裳、信心銘骨、恭爲三庵室、本尊、勤行孜孜追日增長、遂由焉往三山城國淀、復立一寺、名曰長圓寺、（後）滯留日在、復夢三先佛像、告曰何早還三河州、不三吾守護、覺遂驚余不日歸屋、其頃伊藤左馬人爲三秀吉公代官、支配當處、或日早朝狩出霧深人馬難進、仍待三晴於此庵室、乃覽三佛像、一問、是誰像乎、光譽舉三先因緣、一語三靈驗多、左馬點頭祈今日之禽之多、光譽嘆不勝三制唯偏向佛慈

念、左馬狩竟日不^{スルニシテ}得^ニ一禽^一、大叱^ニ謂^{ハク}是今朝佛像或法師加持力之所爲乎、告^ニ從僕^ニ曰^ク須爾僕便摧^レ像罵^ニ光譽^ニ歸^ル、其夜左馬痛苦甚焉、自知^ニ前罪所致^ニ馳^レ使追悔^ニ、途中逢^ニ光譽^ニ赴^ニ淀^ニ、使者曰^ク師何^ニ行^ニ、光譽云^ク吾爲^ニ下^ニ往來之助力^ニ、修^ニ摧破之佛像^ニ赴^ニ淀^ニ、使者伏乞^ニ和睦^ニ、勸^ニ通^ニ左馬追悔之志^ニ、光譽諾^ス、左馬之惱忽愈、慚愧懺悔再^ニ與佛像^ニ復資^ニ光譽建立之志^ニ、終營^ニ成此一字^ニ名曰^ク西方寺^一、時年天正十五年仍號^ニ天正山^ニ、其后片桐市正當處檢地之時境內稍減蓮池成^レ田、又當時鎮守當國金剛山鎮守同一、神武天皇仲哀天皇應神天皇等三十八神、故院號名^ニ三神宮院^ニ、傳聞三十八神記^ニ親房卿^ニ諸社事^ニ往楠正成當國所領^ニ時金剛山上宮當社下宮大社^ニ、今惟毛人谷村當社之氏子^ニ每歲九月四日執^ニ行祭禮^ニ是其遺事^ニ耳^一。

一、中興開基從天正十五年丁亥至元祿九年丙子百十年

一、右之本尊號蓮池如來、在干今

一、傳聞往古號淨土寺大寺由、有池號寺池、今猶存

一、傳承有、淀樣歸依之由、從權現樣爲拜領地之由

一、中興開山光譽入寂元和九癸亥年八月二十一日、壽八十八

これは元祿九年六月八日、時の住職宣譽玄澄が知恩院役者に差出した寺傳であるが、この所傳には民間寺院成立に關する種々のタイプの傳承が纏いつている。(一)往古は淨土寺と號した寺院であつたらしいが、聖德太子に關連つけた傳承が成立していたこと。およそ古跡を聖德太子、行基、空海など民間に著名な僧俗に結びつけている寺傳は枚擧に遑がない。(二)中興開山の長山が蓮社譽號を有した宗侶として傳えられているが、いま問題としている諸國遍歴の遊行聖的タイプであるこ

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖(ひじり)の定着について

と。造寺、佛像修理などの勸進聖でもあつた。(三)蓮池如來なる本尊譚を有すること。佛像が光を放つて所在を示し、地中又は池、河などから取り出して祀られんことを望む話は靈異記その他に多く出ているところであり、後に掲げてある資料(20)も『舊詞』におけるその一例である。またこの像が聖德太子の作と傳えられ、二尺一寸の小像であることから、聖が奉持していた佛像かと思われる。一般に本尊の出現譚や伊藤左馬に關するような靈驗譚などは聖が弘めたものであるが、ここでもその可能性が十分考えられるのである。(四)寺院の建立には本尊又は聖(住職)の靈異乃至勸化に觸發された特定の人物が外護者となつたという傳承が少なくないが、ここでも蓮池如來、長山和尚、伊藤左馬らの三者が揃つて、はじめて西方寺なる寺院が出現している。(五)寺院の山號院號はその成立事情をある程度示す場合が多いが、西方寺の山號は造立年時、院號は鎮守社に因つている。村の鎮寺社と寺院との存在形態は、今日みる限りでも混融している場合が多いが西方寺は鎮守社の社頭に造立されたのであろう。西方寺の開創傳承は神社の堂庵を素地として成立する寺院の存在を想起させる。長山は社頭⁽⁶⁾聖ともみられ、(2)で擧げた日譽上人のごとく鎮守の社頭で説法教化に當つたのである。神佛習合形態は民間宗教の一つの特色である。

ここで、右の諸資料を通して出てくる (一)廻國聖としての開創者の稱號、(二)宗侶(蓮社號譽號所有者)の場合、修學と回國時期との關連、(三)本尊と廻國者との關係などの問題についても觸れるべきであるが、これらについてはいずれ後で述べることにする。

ともあれ右のような傳承資料から、民間淨土宗寺院の成立には回國

行脚の教化僧が介在し、教化僧もまたこれら民間寺院に滞留乃至定住していく傾向が看取され、そのことは特に僻遠の地に顯著に認められるようである。このように近世浄土宗寺院の成立期にあつて、教化僧と寺院の結合が進んでいったことは、中世の教化者教團から僧侶が寺院に固定され、その状態が恒常化した近世教團へと移行していく過程の一面を示すものとして注目に値する。

中世の民間群小寺院—寺庵・佛堂的な—にあつては、必ずしも僧が定住せず、むしろどこからともなくやつてきた教化者が一時的に滞留し、村人を集めては教化勸進し、またいずれへともなく立去るというのが普通であつた。佛堂・寺庵は漂泊の宗教者の寄留所であつた。このような民間佛教の中世の様相は『舊詞』の所傳からも窺われる。

(7) 玄忠寺（備中國小田郡笠岡村）

當寺開基之濫觴者昔有一字梵閣、安置彌陀尊軀貴賤運歩、然文龜年中、有抖擻之沙門自稱其名忠圓、惠心之筆曼陀羅一幅、五尺六寸、横五尺四寸、荷負來而掛彼堂及講談數席、以茲歸依之輩繁信仰之族多、爾彼僧講筵終而永失所在（第三三冊）

(8) 蓮生寺（但馬國國氣郡多都野田村）

開山熊谷蓮生法師號、其由來尋、彼法師或時廻向之砌此處往暮、辻堂宿通夜高聲念佛唱、聞者感催、運一心清淨土歩人自貴敬佛閣建立、即蓮生寺名而已殘、早立出旅之天吾妻路志行、無程武藏國村岡云所雖居云々（下略）（第二九冊）

(7) に出てくる忠圓なる抖擻沙門は、來迎圖をもつて村々の佛堂から佛堂へと廻り、村人を勸化したひじりであり、(8)からは、行きく

とある辻堂に泊り、通夜念佛を行なう廻國遊行の念佛ひじりが髣髴と浮んでくる。また

(9) 淨念寺（越後國岩船郡村上）

開山淨念明應年中廻國之僧來托鉢弘通念佛名言淨念、又他國之商人此地移住見彼僧殊勝而仰信之、又歎無念佛宗爲結草庵令住職、淨念念佛興行十箇年也、永正年中往生矣、其後廻國之來住即淨念爲號也（第二六冊）

とある如く、廻國僧が定住して歿した後の寺には、同様の廻國僧やつて來てが入寺したのである。止住の期間が長期になつていゝと云え、村堂がひじりの到來を次々に迎えたのと原則的にはかわらなかつた。

以上のように廻國・止住に關する『舊詞』の所傳から、鎌倉・室町に顯著な存在であつた遊行聖の活躍を中世の終末期、立場をかえてみれば浄土宗近世寺院の發生期においても認めることができるのである。「廻國行脚」「遍歴修行」の僧などと表現されているが、要するに遊行聖の傳統をもつたこれら教化者が、浄土宗教團史上の中世と近世の脈絡に寄與したことは否めない。そこで回國聖の特色を帯びた教化僧が浄土宗寺院を造立したり、堂庵を淨利化して定着してくる時期をみると、計數的な處理を試みたところでは、天正—慶長の頃、特に慶長年間に集中するようである。ちようど江戸幕府の政治支配體制に佛教が組み入れられ、僧侶寺院に對する統制が加えられたのが、家康晩年の慶長末から元和にかけての時期であるから、聖的宗侶の定着に幕府の宗教統制が關係していることは明らかである。

廻國遊行の聖として現われる淨土宗寺院の開創者(開山又は中興開山)に對してどのような法號が與えられているかは、彼らが淨土宗教團とどの程度のかかわりをもつかを示すものとして注目される。蓮社號譽號をもっているものと道心者とよばれているものとは、教團内部における地位に相當な差位がある。蓮社號と阿彌號との場合も同様である。

開創者に對する法號について舊詞の記載形式を検討すると、(一)蓮社號譽號をもっているもの、(二)蓮社號又は譽號だけをもっているもの、(三)阿號をもっているもの、(四)阿彌號をもっているもの、(五)單に入道名だけで法號のないもの等の諸類型に歸納できる。當然のことながら(一)から(三)までは必ず道名がわかつてゐる。しかし(三)と(四)とは阿號又は阿彌號それ自體が僧名となつてゐる場合が多く、譽號と組合されてゐることも少なくない。廻國聖として現われる開創者をこの分類にあててみると、そのいずれのケースも存在するが、遊行聖という概念からするとちよつと案外なのは、(一)の場合が比較的多いということである。前節に掲げた開創者でも蓮社號譽號をもつたものが多い。

蓮社號や譽號については、檀林制規が確立した近世では宗戒兩脈を稟受した名譽の法號が蓮社號、五重宗脈を受けたものの嘉號が譽號とされ、蓮社・譽號の併稱は江戸時代に入つてから一般化したものであるから、『舊詞』に開創者が蓮社號・譽號を所有する者として出ていても、これを以て直ちに事實であつたと斷ずることはできない。「開

山」として名譽ある地位が與えられるため、後代の住職が僭稱したのかもしれない。譽號については白旗寂惠の高弟定慧からはじまるとされ、時宗側の資料でも譽號は定慧からはじまり、しかも白旗派では時宗とまぎらわしいためそれまでの阿彌陀佛號をやめて譽號を稱するようになったという。即ち『麻山集』には

光明寺二代白旗寂惠ニ上足ノ弟子二人居リ、一人ハ小田原城主大森某ノ次男惠光、一人ハ箕田ノ定慧ナリ、定慧ハ其頃一代ノ將軍家御歸依ニ由テ乘願寺ヲ建立シ、千石千貫ヲ御寄進アリテ定慧ヲ光明寺三世ノ住持ニ補セラル、惠光大ニ憤リ怨テ父大森ニ語テ曰ク、定慧既ニ公方ノ御歸依ニ依テ一山ヲ建立ス、吾モ亦一寺ヲ建ント思フト、大森即千石千貫ヲ辨シ、藤澤寺ヲ建テ是ニ補セラル、此寺大ニ繁昌ス、定慧聞之、別時ノ時節潛ニ詣テ伺フ處ニ、住持ノ上人ヲ始テ沙彌下僧マテ何阿彌陀佛ヲ稱シ相呼ブ、定慧是ニ簡別シ、善導ノ五種ノ嘉號ニ由テ先自ラ良譽ト稱ス。良忠ノ下ヨリ六流分ル、其中ニ白旗ノ一流惣領職ノ故ニ、此一流ニ譽號ヲ稱スル成例トス

と書かれてゐる。⁽⁹⁾蓮社號は二祖聖光房辨長の門弟圓心が廬山の宗風を傳えたに始まるとされ、かの安貞二年の末代念佛授手印起請文にも蓮社を稱してゐる僧が若干見出される。またこの起請文には何阿、何阿彌陀佛という僧名が書かれてゐるが、かかる阿彌陀佛號は聖岡以前の初期淨土宗教團を繞る人々に多く見出される。⁽¹⁰⁾定慧の弟子が聖岡であり、聖岡が明徳四年に五重宗脈の制を立て、これを弟子聖聰に授けてゐるので、鎮西白旗派では室町中期から法號としての譽號が普遍化した⁽⁸⁾が、必ずしも檀林との關係はなかつたと考えられる。しかし、譽號

に蓮社號をセツトして何蓮社何譽と號するのは檀林制度が確立してからであろう。いわゆる十八檀林が設定された年時は慶長七年とも元和元年ともいつてはつきりしないが、慶長・元和・寛永の頃に行脚の生活から寺院へ入つたものの中には、檀林修學を了えて、宗侶資格をもつた僧侶がいたことは間違ひなからう。

さきに掲げた龍原寺(豊後臼杵)の開山岷蓮社圓譽路廓上人は慶長五年に綸旨を頂戴して豊後に下向したし、長徳寺(伊豫國伊豫郡松前)の開山一蓮社念譽上人宗外和尚の「修學檀林者下總國生實大巖寺」であり、「從關東爲回國當所」で長徳寺を建てたのは天正元年であつた(第三六冊)。また淨土寺(但馬國氣多郡西下芝村)開山天蓮社泰譽上人一風和尚の「檀林者小石川傳通院」であり、慶長二年に起立したという(第二九冊)。淨國寺(越後國岩船郡村上)の開山往蓮社生譽吞虎は「修學之内廻國之志、來當所而説法利生、檀越歸依而草創當寺」したが、時に元和五年であつた(第二六冊)。これらはもより傳承であるが、「檀林辭退諸國修行」(第十冊、養谷寺條)というように、修學後も回國に出ることがあつたのを推察し得る。

問題は、學なりとげた正式の淨土宗侶であるを否とを問はず、開創者に廻國行脚の傳統が根強く受け繼がれていることである。竹田聽洲教授の意見によれば、修學後も直ちに師匠の寺又は生國にもどらないで、できるだけ廻國行脚することが要請されていたのではないかとのことであるが、他國で縁を結ぶことの功德もさることながら、行脚それ自體が修行であつたことを思えば、このことは十分考えられるところである。彼らは關東、四國、九州、中國へと「求有緣靈地」(第五十

冊、成徳寺條)め「菩提のため諸國回國」(第一冊、誓願寺條)したが、この頃社會一般に高まつた社寺參詣、巡禮、納札の風がその回國を助長していた。淨土宗でも社寺參詣は獎勵された。例えば明應元年金勝阿彌陀寺の宗眞が定めた「宗鉢諸末寺法度之事」に

物詣之事、伊勢熊野善光寺などの事ハ一ハ恩徳執謝のため、一ハ世間の有爲無常を知りて信行増進のためならば參らるべしと出ている。⁽¹¹⁾

武藏國秩父郡白川村白久の實雲寺に、天文六年秩父巡禮の木札が奉納されたが、それには

旦那秩父住人 沃目之菊子

秩父三十三處巡禮 聖四國土州住僧智杵

とあり、四國の聖が旦那の援助で遠く關東へ巡禮していることがわかる。このようなことが淨土宗または淨土宗に近い念佛聖にもみられたことと思われる。かかる廻國の風の高潮が『舊詞』の傳承にも反映し「元祖建久年中御回國之刻御立寄之由」(第二九冊、三縁寺條)と法然をも廻國聖とみ、また勅傳に有名な無智の空阿彌陀佛を、法然の眞影を「爲本尊諸國修行」する聖にしてしまい、さらに三祖然阿彌陀佛良忠を「然師關東下向之次於此地勸化、且爲御遺誠在家之徒被授阿彌號、彼末葉在今觀阿彌專阿彌等之末」(第一四冊、觀音寺條)と旅の勸進聖に見做している。この最後の良忠に關する記事には時宗の遊行聖が投影しているようである。因に筆者の調査によれば、良忠の勸化を受けたという觀阿彌等の子孫が残つていて、觀阿彌は八鳥家、道阿彌は清水家の祖であるといい、觀音寺ではお盆に良忠にはじまるという「記

主念佛」なる新亡供養の念佛が今も行なわれている⁽¹³⁾。『舊詞』によれば桑名の十念寺は開山に譽阿彌陀佛を仰いでいるが、記主禪師(然阿良忠)が「往還之路邊立寄譽阿彌陀佛之庵」り旅宿とされた因縁があるという。この「譽阿彌」にも時衆的な面影がある。

時宗と云えば淨土宗との關係は密接であり、初期の時衆教團は鎮西流義を體驗した人々を中心に展開しており、遊行派の時衆教團が次第に鎮西奥をおびつつ移行したと云われている⁽¹⁴⁾。時宗の衰退は眞宗へ吸収されたがためであるというが、淨土宗への流入も考えねばならない。この點についての考究は大橋俊雄氏によつて緒にいたばかりであつて、今後に残された課題である。いま時宗との關係を窺うに足る傳承を『舊詞』の記載から二、三指摘しておこう。

(10) 冷巖寺(周防國吉敷郡平野村)

風聞往昔時宗之寺也、開山者號淨阿彌陀佛矣、明應六年之比回國行脚之砌至于此地一宿也、邑石佛彌陀之尊像瑞相頻也、故止于地建立一字稱平安寺、而永正九壬申歲七月廿八日示寂也、雖爾生國姓氏更無知者也、而後中絶年久矣、慶長年中之間鎮西之末流周諦大德再興之、改雲心山冷巖寺(後略)(第三三冊)

(11) 光照寺(武藏國足立郡加村)

(前脱カ)
開山心譽和尚檀林附法東漸寺、起立百四年時宗阿彌開基號光久寺、正保元年乙酉心譽再興之、改於寺號名光照寺(第四七冊)

(12) 瑞現寺(越中國野村津幡口村)

當寺開基者嘉慶元年佛眼明心上人建立、開山剃髮之所不知、師匠者

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖(ひじり)の定着について

遊行陀阿、開山學問檀林附師不知(第二八冊)

(13) 西光寺(肥前國神崎郡三津村)

右者遊行之門派筑前國博多稱名寺同時代開基、其節時宗中興開山專譽惣運生國筑前姓氏江上氏本名高阿彌、鎮西本山十八世辨譽上人傳戒之弟子罷成、當寺興立仕、專譽惣運終焉之年月康正元乙亥年二月十五日寂(第四二冊)

(10) (11)は時宗寺院を再興し、(12)は師匠が時宗の僧であつたことを、(13)は中興開山自身が元は時宗であつたことをそれぞれ語っている。また丹後國府溝尻村の長福寺の開山は其阿彌陀佛であつた(第二七冊)。何阿彌陀佛、何阿彌という名前が時衆の特徴であるとするなら、淨土宗寺院の開創者にみられる阿彌陀佛乃至阿彌の號についても、時衆との關係を考慮に入れて取扱う必要がある。阿彌號などが淨土宗、時宗に共通していることは、彼らが時宗とか淨土宗という宗派色を帯びる以前にまず念佛ひじりであつたことを示唆していよう。中世の淨土教を考へる上にそのことを見落してはならない。となると時宗、淨土宗に通有する念佛の性格を考へる必要があるが、このことについては後でふれる筈である。阿彌佛陀乃至阿彌號を『舊詞』から取出すと、近江を最高に山城、攝津、大和、紀伊、伊賀、伊勢、丹後などの畿内並びにその周邊部と越中、肥前などの邊境にみられるが、彼等は時宗的でもあり淨土宗的でもあつた念佛者とみられる。近江の阿彌僧が湖南を中心に分布していることは、守山を據點に湖南に勢力のあつた時宗と無關係ではあるまい。

このように阿彌乃至阿彌號所有者は民間の念佛ひじりであるが「前

亡後滅精靈乃至法界衆生一蓮託生同證佛果令廻向」めた伊勢國飯野郡射和村の蓮華精舎寺の開山花譽蓮阿彌も時衆的かつ淨土宗的色彩をもつた民間念佛聖とみてよい。

かくて、開創者の法號に關するさきの分類での(三)四は本質的には民間の念佛聖であつて、開創傳承に明示されていなくても、彼らは廻國の聖としての性格をもつと賦與して考えてよいものである。なお、阿彌僧ら在地民間僧のなかには死者を葬り弔うことを任務とするものがあった。かかる阿彌僧についてはかつてのべたことがあるのでここでは觸れないが、原田敏明氏がかつてあかされたように墓寺又はこれに準ずるものが多い鎮西派寺院には、葬送追善を機能とする念佛を弘通する遊行の阿彌僧が定着した佛堂寺庵から發展したものが少なくないことだけを指摘しておきたい。また(二)の譽號をもつものについても性格的には(三)四とかわらないものが少なくかつた筈である。

次に同じく分類(四)に該當するなかで特に道心者と云われるものについて述べておこう。道心者は正式の僧とは認められないが、民間の道場・庵室・佛堂に多く止住していたのが彼等であつた。防州佐波郡宮市邑の正定寺もその小庵時代には「平僧或道心者西堂」が住込んでいたし(第二七冊)、同じく吉敷郡山口郷の醫王寺も「自古來藥師堂而道心者住居」していた(同上)。對馬府中の修善庵には雉髪唱念の非僧すなわち道心者が住し(第四三冊)、近江栗太郡矢倉村の光傳寺と同郡野路村の教善寺を中興したのは「清譽淨運申道心者」であつた(第二三冊)。道心上りの開山も居たわけであり、道心者歴住の寺もあつた。

(14) 往生寺(信濃國水内郡越村)

當寺開基者筑前國荳之庄松浦之末葉加藤左衛門尉重氏發心名荳道心、然而到此之地閉寂莫之扉一專修念佛報命既盡此寺往生、依茲當寺名往生寺、中頃無住而寺宇悉零落、余而寬永年中越後之邦高田善導寺弟子久傳道心者詣善光寺之次而到此靈場、慨古跡之頽沒一抽一心之丹誠速以再興矣、自余以來久傳道心於爲中興代々相續、第二代極念道心者生國者信州松城之所生當地往生、第三代安心道心者當寺往生、平生之時分于日長行相勸、第四代入西道心者生國者勢州寺往生、第五代圓西道心者所生善光寺當寺落命、第六代覺心道心生國者越後國高田之所生也(後略)(第二五冊)

このように道心者も土地の者とは限られず、遠國より來るものがあつた。先きの近江矢倉村光傳寺等を中興した道心は奥州の人であつた。道心者も亦行脚移動した。(14)の所傳はこのことを示唆している。伯耆國八橋郡赤崎町の專稱寺は「中頃平僧道心者等移任任既及大破」んだという(第三十冊)。

在地の記録によつて道心者やこれと類似の平僧などと寺庵・佛堂との關係を窺つてみよう。筆者はかつて福井縣南條郡今庄町四ヶ谷方面を調査したことがある。その時橋立の示西院で見た正徳六年の『示西院行支帳』⁽¹⁹⁾にはこの寺及び配下の道場の歴史が書かれていたが、平僧道心にも觸れてあつた。少し時代は降るが地方寺院の様子を知る上に参考となるので、以下、直接關係する部分だけを紹介しておこう。

〔示西院行支帳〕

一、當院開山良如上人ヨリ己ノ來タ流譽代迄代々一文不通之平僧在家同支行跡之由シ申シ傳候、其間智傳西堂而已關東被レ勤シトカヤ

は高聲念佛と鉦叩念佛や踊念佛の藝能、それに唱導の文學に特色を有し、中期高野聖を代表した。千手院聖は時宗聖であるが、この千手院谷の時宗が室町時代には蓮華谷聖や萱堂聖などを次第に吸収して、時宗化した高野聖、即ち後期高野聖を生んだという。⁽²³⁾『淨土三國佛祖傳集』に云うように、高野聖としての道心衆が民間寺院に姿を現わし、高聲念佛を勤めることがあつた。さきに引いた四の所傳は、往生寺が萱堂聖系の道心寺であつたことを示している。そこでは刈萱道心の唱導文學が物語られていたことであらう。

この道心衆と並んで勸進衆(十穀聖)が『淨土三國佛祖傳集』に擧げられていることはさきに述べた通りであるが、この十穀聖はこの書物や慧空の『叢林集』が云うように重源を本とすると考えられ、中世には社寺の勸進に活躍していた。⁽²⁴⁾十穀聖には阿號を稱するものもあつて、念佛系聖に近く、それだけに淨土宗とも無關係ではなかつた。近江國蒲生郡市子村の誓安寺は『舊詞』に「起立天文十四年開山永順法師由緒來歷等不知」とのみ書かれているが、この開山は十穀聖であり、土豪が起立した寺に住したことが當寺の左の文書によつて知られる。

〔定道場掟條々〕⁽²⁶⁾

一、今度爲各新建立一寺事、爲結縁被取立上者、自他之志、同寄進田等、不_レ可_レ寄_ニ多少_一、縱又雖爲寄進有無、不顧其輕重、遍惣檀那分之事。

一、當住持永順十穀、但一期之後者、各有御相談、可_レ然坊主可_レ被_ニ相居_一事

一、各寄進田畠前後分、或庄内、或雖爲公界、名主并至于土民

等、自然志在_レ之分事、永代當寺領無_ニ相違_一樣互可_レ有_ニ御異見_一事。

一、寄進狀其外證據等箱江被入置、宿老一人同兩年行事、已上被_ニ相以_ニ三判_一被_ニ御封付_一、毎年十二月十五日_ニ次之_一年行事_ニ槌可_レ渡_一、同於寺用之儀、右之役人_ニ被_ニ仰候者_一、頓惣分_ニ可_レ有_ニ御案内_一事。

一、年行事役之事者、今度始而御建立十三人爲子孫、永代可_レ有_ニ御相續_一、更別人不_レ可_レ有_ニ裁判_一事。

一、於道場之儀者、皆以可_レ專_ニ正路_一、聊不_レ可_レ構_ニ私曲_一事。

一、於寺内_ニ若可_レ被_ニ相立_ニ墓面_一々候者、不_レ寄_ニ上下之輩_一、爲地代分_ニ鳥目_一廿足、可_レ被_ニ出_一之、并位牌同率都婆之事、是又惣別被_ニ任_一志、住持同年行事_ニ可_レ被_ニ相理_一事。

一、就道場之儀、万一以後公事邊出來候者、御建立人數之内、御定評衆、年寄二人、若年三人、被_ニ入_ニ交關_一、五認於御本尊前被_ニ取_一當、五人之衆以靈社起請文、速被_ニ付_ニ判仕_一可_レ爲_ニ落居_一事。

一、正面壁書事、道場有造畢、寺號等被_ニ相極_一、其刻各以御閑談、如憲法_ニ可_レ被_ニ相定_一事

一、此事書自然紛失候者、後日傍示等可_レ爲_ニ如何_一候哉、爲後用_ニ二通相認_一、一通年行事、并一通事者爲各可_レ有_ニ御所持_一事

一、此御人數之内、向後御所會之族雖在_レ之、於道場之儀者、自他有_ニ御參會_一互可_レ有_ニ御異見_一事

一、尙各被_ニ加_ニ御分別_一、始終可_レ被_ニ定置_ニ條數_一候者、如順路_ニ追而

可_レ被_二仰合_一事

一、年中行事御人數拾參人事、圖次第

一番 五郎左衛門重長
孫左衛門尉長種

二番 城主 右衛門太夫長弘 後ニ 因幡守秀家
四郎左衛門尉正長

三番 向入道 道喜 同孫次郎長朝
次郎左衛門尉長種

四番 五郎兵衛尉光長
右京亮長政

五番 太郎兵衛尉頼長
與一郎長朝

六番 源右衛門尉行長
管右衛門尉良長

己上

右法度條々被_二定置_一上者、爲_二當年行事_一可_レ致_二判形_一由、衆議相極如_レ此候條、聊以向後不_レ可_レ有_二別儀_一者也

天文拾四乙巳年十月十四日

年行事 孫左衛門尉

長 種 花押

年行事 五郎左衛門尉

重 長 花押

この「定道場掟條々」は菩提寺的性格をもつ寺院の成立を考える上に多くの示唆を與えてくれるものであるが、當面の課題たる開創者乃至住持については、十數聖永順を住持せしめ、その没後は然るべき坊主を選んで居住せしめるよう規定している。勸進の聖を迎えて生涯定住せしめ、その後も同様のことを繰返す意向のあつたことが窺える。因に誓安寺の本尊は藤原時代と推定される阿彌陀如來坐像(旧國寶、明治四四年八月指定)

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖(ひじり)の定着について

であるが、永順はこの本尊を迎えるのに活躍した人物であつたかもしれない。

ともあれ、高野聖や勸進聖系の民間教化者をも内に抱えた分類(Ⅱ)の平僧・道心者のタイプは、寺院以前の堂庵や淨土宗侶が定住するまでの寺院を、しばしの止住やあるいは定着することによつて、支えていたのである。彼等が開創傳承に登場する所以がここにある。成立期の淨土宗寺院の周邊には、これといった宗團に屬さないいろいろな民間念佛僧が出沒し、淨土宗の教團的進展は彼らとの關係を有しながらなされていつたことを考えれば、民間のひじり僧の系譜をひく教化者に對して積極的な意義を認めざるを得ない。しかし同時に、かの明應元年の金勝阿彌陀寺末寺法度に窺われる如く、民間勸進聖などからはつきり一線を畫そうとする態度が宗侶側に出ていたことを考えるならば、聖の墮落がもたらすマイナス面が教團としては問題であつたことに注意し、その功罪兩面から評價する必要がある。

四

次に回國聖と佛像などとの關係を窺い、佛像の寺院への定置、即ちその本尊化について述べてみたい。いうならば佛像等の寺院定着を上げたい。この問題については次の傳承資料が參考となる。

(Ⅱ) 永福寺(攝津國矢田郡兵庫津)

聞山者號空性如來、生國者信州之人姓氏剃髮之師并附法之師等不審、當寺移住之節一光三尊之本像并自畫自影說法之相持來(後略)

(第十一冊)

④ 松光寺（武藏國荏原郡三田村二本榎）

開山光蓮社曇譽捷徑生國者豆州伊東藤厚氏伊藤祐親入道末孫也、初者江戸馬喰町願行寺住隠居西窪住年久、爾或夜夢金色僧來告云、此所一字可起立吾成大檀那示、亦翌日之夜爾示然而隱者之身自元無起立之望瑞夢不覺、又第三夜之夢告云、吾明日來而可成一字之主示、翌日前夢語所御長二尺三寸六分彌陀之立像山伏持來汝可與本尊精舎建立而可安置之云、曇譽問云汝何人何國來否報謝與云、答云吾酉金山者也去行方不知、果瑞夢知、幾程無武陽江府幸橋小林吉兵衛云富人來一字起立（下略）（第十九冊）

⑤ 引接寺（長門國豐浦郡赤間関）

開山者西蓮社忠譽上人榮輪一得和尚（中略）當寺起立者人王百七代正親町院御宇下向當所、其頃有關江淨秀者深歸敬忠譽一得和尚、以招請自宅念佛矣、稱名未然中沙門一人來對一得和尚附與三尊之畫像、有暫退去、視夫來迎之彌陀引接之彌陀佛發遣之釋迦是則于世希有之佛繪也、欲起立一字所當龜山八幡宮之麓有古跡號善福寺相改之、永祿元戊午孟夏之間而開基之也、山號關龜山安置來迎引接之如來故號來迎院（後略）（第三三冊）

ここには、ひじりの持ち來たつた木像又は畫佛がその土地の僧に附與され、これが機縁となつて一寺が建立され、その本尊になるというパターンが示されている。④は佛像をもつてきたものと安置してまつるものとが同一であるが、この空性如來は善光寺聖である。善光寺聖についてはこの後でのべることにする。⑤は寺號などが何によつてつけられるかを示唆するものであるが、遊行の沙門によつてもたらされ

た來迎圖から院號寺號がつけられている。また行脚の僧が逗留して佛像をつくり、これを安置する寺院が建立されるというパターンもあつて、次はその一例である

⑥ 阿彌陀寺（信濃國小縣郡青木村）

當寺（光明山攝取院）起立開山者聖蓮社寂譽宅傳（中略）然當國善光寺佛詣之砌逗留于此村、鄉之名主并宿老歸依之檀越置興行別時念佛恭□勤修切也、于粵寂譽勤行之餘暇彌陀之尊像千驅自刻彫之、依之名主渡邊氏割先祖□□地□付屬寂譽故勤勵隣里鄉間建立精舎一字、安置千驅之尊容年中尊成專修勤行之靈場也（後略）（第二六冊）

寺號山號院號とも寂譽の彫刻した尊像に因つてゐることは明らかである。また名越派の流れを汲む奥州猶葉郡磐城折木村成徳寺の所傳をみると「曾而所製畫向數十卷然而後隨僧十餘裴各爲荷擔制作之聖敬、敢欲求有緣靈地成行脚」（第五〇冊）とあつて、弟子によつて聖教が地方に傳えられていくさまが書かれているが、これは聖の弘傳方式と同じであつて、聖教を佛像に置き換えてみれば、佛像を背負つてその安置場所を求めて旅行く聖の姿が浮び上つてくる。聖に背負われた佛像は二尺前後の小佛が普通であつた。さきの④の資料では二尺三寸六分と出ていたし、相模國鎌倉郡下野庭村正應寺の本尊は一尺八寸であつたが、「此本尊ハ江戸梅窓院弟子西運廻國供養佛」であつた（第一冊）。また相模國鎌倉郡深谷村專念寺には地藏堂があり、そこに安置された地藏菩薩は欲譽厭求が回國に用いた佛像であつて、のち彼が寄附したものであつた（第一冊）。

このように聖に背負われた佛像はしかるべき寺堂に落着いたのであ

る。

寺の縁起をみてみると彌陀の化身から佛像をさすかつたなどとするのによく出くわすが、粉飾をとり去つてみると、右にのべたような聖とその奉持佛像の關係が看取されるのである。地方の無名寺院に傳えられているこの種の傳承を左に紹介しよう。

〔滋賀縣栗太郡栗東町小柿・常勝寺緣起〕⁽²⁸⁾

傳その濫觴を案するに、當時聞山僧阿彌陀佛と申せし人は天台宗の學侶法印實圓といひし人也（中略）然るに延文元年卯月八日に道俗男女相集りて佛誕生日なりとて浴佛の行ひをなす、其の辰の一天に忽然として一人の童子來れり、其姿蒼笠をかぶり草履をはき、脛高なるよそほひにて背には木像の阿ミタを於ひ奉り、直に當寺の住持法印に向つていはく、此木像の阿彌陀を法印へ預け奉るべし、子細は後日に顯るべしといひて何地ともなく行去ぬ、法印何となく木像の彌陀を預り、すなはち佛檀のかたへる安置す、扱其日もくれやうく其夜も曉になりて法印あ迦水を結び、花のはなかなミを手にして三密瑜伽の法燈をかかけてつくく佛檀を窺ひみれば、地藏乃三尊ハ佛檀のかたへにうつり賜ひ、預りたる木像乃阿彌陀中尊となりて座し給へり、法印於もへらく、是併兒同宿の所行なりと於もへり、故に心はられなから彌陀乃木像をかたにとりな越し本のことくに地藏菩薩を中尊と須、それより乃ちたひたひに地藏の三尊かたへにうつり給ひ、木像の彌陀中尊となり多まへり、法印寄異の於もひなして終日終夜佛壇を窺ひみるに、地藏の三尊みつからかたへにうつり給ひ、木像の阿ミタ光りを放ちて中尊となり給へり、法印胸う

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖（ひじり）の定着について

ち塞り、感涙肝に銘して、あはや多ふときと思へり、即ち心に思へらく、これ併、生身の阿ミタ如來童子となり木像のみたとなりて我等をたすけ給ふなるべし、所詮今よりのち多年修學の天台宗を闍て、念佛三昧の身とならんには志かしと思へり、其より後ち自行化他ひとへに念佛の行者となれり、折しも其年洛陽四條道場錦綾山太平興國金蓮寺四代上人淨阿彌陀佛此里此村に念佛の弘通をなし給へり、道俗男女たうとミ阿へりければ參詣の人人門前市をなす、法印此弘通をうけるようこび渡りに船越得闇夜に燈を得たるがごとくに、二こころなく金蓮寺上人に隨逐し奉りて往生淨土の安心を落着して其名をハ僧阿彌陀佛と改む、即ち當寺道場の開山上人はなり。この常勝寺は時宗であるが、右の所傳によつて時宗、淨土宗ともに共通のパタンがあることを示し得たと思う。前述の通り寺院の成立に關與した遊行的教化僧について、時宗と淨土宗に通有性がある以上、かかる教化僧が果す佛像のもたらし方にも共通性があるのは蓋し當然である。

次に資料④に出ていたような善光寺聖を通して、佛像の流布と聖の關係を窺つてみたい。善光寺聖は善光寺如來の模刻流布で世に知られている。善光寺如來像の流布と善光寺聖について最近では金井清光氏の研究があるが、鎌倉時代の善光寺如來像の流布に重點が置かれている。ここでは當面の課題に従つて、『舊詞』に基づいて近世淨土宗教團胎動期における善光寺如來像流布の傳承を取扱つていく。

④ 新善光寺（越後國蒲原郡小川莊津川懸）

開山定尊上人（略）（建久五年善光寺參籠）陽月十五日夢曰寶堂二重御

戸開内外錦帳舉如來忽然一光三尊赫奕(略)然宮殿有音聲告定尊曰、慈尊出世不遠三會曉天在近、其間沈生死之海衆生皆墜三途、欲益汝速勸進一切衆生冶鑄我形像等身金銅矣(略)建久六年夏拾五日奉冶鑄中尊、同廿八日奉觀音勢至鑄也(略)定尊無上菩提願深佛法興隆之志厚、等身如來安置于茲號新善光寺也(後略)(第四八冊)

善光寺如來鑄造で傳承上著名な定尊と貞治の頃感誓が開いた藤田派有縁のこの新善光寺とは關係はないのであるが、新善光寺のこの傳承は善光寺縁起と同じであつて、この背景に善光寺如來の模造とともに定尊の傳説を傳えた善光寺聖の存在が想像されるのである。京の六角堂の西隅にあつた如來寺にも「信州善光寺如來模一光三尊之如來」が安置され、定尊法師の作であるとの縁起があつたという(第二冊)。近世初頭この新善光寺には信州から如來を慕つて移つてきた時衆が居て時衆寺が四ヶ寺あつたことが『舊詞』によつて知られるのである。⁽³¹⁾

② 願行寺(信濃國小縣郡上田海野町)

當寺起立之根元者當國本海野之鄉有之、然筑摩川水面耀光數日、諸人不審即善光寺如來之御寫聖德太子之御作一光三尊之金佛自川奉取上、依爲所守護而滋野氏^江訴之、國宰建立一字願行寺也、彼本山奉納歸敬尤深于今當寺安置矣、開山者日蓮社東譽(略)第六世中興頓連社圓譽厭問和尚(略)當國佐久郡岩村田西念寺ヨリ移住、于當寺災上以後三尊之像安置本堂、厭問平生願望、傳聞此三尊者聖德太子依所願善光寺之如來鑄寫移給以光明之燈一光三尊之像四十八體所奉鑄寫之尊影也、安置本堂佛奉仰祕佛乞願有眩蒙瑞夢、汝所願深故有縁之授本尊早河西可奉迎、依之夙迅向西行二里餘而值行脚之僧、

互有思合故問、客何地エカ行、旅僧答之、我是西國邊之者也依本尊之御告當國小縣郡上田邊寺^江本尊爲寄進奉守也、圓譽隨喜於途中瑞夢語、僧本尊渡去矣、其跡所願之通從是本堂奉安置精誠勤行今本堂佛是也、座像御長貳尺貳寸運慶之作也(下略)(第二六冊)

② 新善光寺(能登國真脇村)

當寺開闢者行基菩薩回國之砌、御長一尺五寸一光三尊木佛草庵置給(第二八冊)

善光寺如來に聖德太子や行基菩薩が結びついていることはいかにも民間宗教的であり説話的要素が濃厚であるが、②の傳承に出てくる中興圓譽厭問に二尺二寸の善光寺如來をさすけた行脚の僧や、②の行基傳説から、善光寺如來の模像を流布した數多くの善光寺聖が浮び上つてくる。善光寺如來と聖德太子や行基とを結びつけ、民衆の信仰を高揚させたのも他ならぬ善光寺聖自身であつた。聖德太子と善光寺如來との問答のことが善光寺縁起に出ているので、善光寺信仰と太子信仰とが結びつく素地はあつたわけであるが、造像者を聖德太子とし、太子信仰にあわせて善光寺如來信仰を高めていつたのはこれら善光寺聖である。善光寺聖は善光寺如來の使者でもあつた。資料④に掲げた永福寺の開山空性如來は説法相の自影をも持つて移住してきたが、その圖には「於信州善光寺有雲上聲告之如來、頌曰、本主西方名阿彌陀來回此度教化衆生度此三々性淨圓明空性如來一聞説法永絕生死云々」との讚が書かれていたという(第十一冊)。

さらに、今まで見てきたようになんらかの形で聖がタッチしているような寺院には、その開創について行基との關係を傳えた説話を有し

ている場合が多いことを指摘し、少しこのことについてのべておきたい。

聖が關與した地方民間の寺院が、その前歴について行基開創を主張しているのは、後世の聖たちの間に、行基を己れらと同じような遍歷回國の聖とみる行基觀が普遍化し、かゝる聖が民間寺院に關與していたがためである。つまり回國聖の典型として行基が考えられていたのである。『舊詞』でも「行基菩薩回國」(資料②)「諸州行化」(資料③)「六十餘州回國」(資料④)といった表現が使われている。

(22) 龍宮寺(筑前國志摩郡浜崎浦)

人王四十代天武天皇治世行基菩薩六十餘州廻國之砌博多之地鎮依崇敬、則此所而三寶荒神之尊像一體有刻而白鳳十二癸未天正月二十八日籠置社内者也、自爾以來至今津中之歸敬日増々樂也、行基菩薩從籠新像以來到今年一千十餘歲也。(中略)其翌年貞應二癸未年三月十八日志賀之從海中觀音之尊形一體綱カカツテ出現、則慈覺大師御作立像而御長一尺八寸聖觀音之印像也、其夜之夢想龍宮寺可納之旨任瑞夢當寺納之、右觀音之本備置到今萬民運歩者也(後略)(第三七冊)こゝでも行基も回國聖と理解され、佛像をつくつてその地にとどめておく聖として受け取られている。後半は行基と關係ないが、慈覺大師作といわれる靈像も亦聖によつてもたらされたものであることを示す好例として掲げておいた。行基が諸國遍歷の途次佛像を作り、これが今の本尊であると稱する寺院は少なくない。行脚の淨土僧はこのような傳承をもつ所へやつてくるのである。

(23) 延命寺(駿河國庵原郡由比)

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖(ひじり)の定着について

有延命地藏薩埵、即行基菩薩朱鳥年中諸州行化之節此地海邊而以殺生爲家業悲之、於此所以楠大木造立六尺有餘之地藏菩薩聞民信仰之、因茲天正七己卯年行譽來至此地、建地藏堂號延命寺(第十八冊)

(24) 孝恩寺(和泉國南郡木積村)

行基菩薩五十歲之御年開基至于今開山御直作之佛菩薩多有之、右之寺中絶以後天文年木積村之守護河崎傳内ト申仁菩提地ニ被取建、則春木村西福寺中興燈譽上人之弟子住僧被指置、夫ヨリ以來淨土宗相續仕候由古老申傳(後略)(第九冊)

(25) 光圓寺(江戸小石川)

行基菩薩關東下向之砌自刻藥師之像堂草給、于今藥師像有之、應永年中了譽上人參籠之由之傳也(第二十冊)

伊勢國飯野郡射和村の伊福寺は「開山行基菩薩、中興淨土宗成阿彌陀佛」(第十三冊)、攝津國武庫郡小松村の等覺院は「開山行基等菩薩、當時小松村神宮寺而本尊十一面觀世音菩薩(中略)中興圓蓮社光譽改淨土宗」(第十冊)という傳承を有していた。また開創傳承の上で行基—重源—淨土僧という系譜が形成されている寺もあつた。次の資料がそれである。

(26) 淨土寺(防州佐波郡下徳地邑)

當寺厥初俊乘重源之所創建地也、安置諸像者中尊四尺彌陀之座像并觀音地藏不動毘沙門右左之各四五尺之立像是皆行基菩薩埵之作也、中古數百歲損破漸有佛像而已、明曆年中光譽唯心大德興再之也。

(第二七冊)

聖の世界において行基—重源という系譜ができていていることについて

は他でのべたことがあるが、近世初頭の開創傳承の上でもこの系譜が消えていないことは興味深い。このほかに行基開創の傳承をもつ寺院に勢州三重郡四日市の一樂庵(第十四冊)、大和國葛上郡檜原村の九品寺(第七冊)、同葛上郡竹田村の來迎寺(同上)、同忍海郡平岡村の極樂寺(同上)、美濃國厚見郡加納村の寶樹院(第四三冊)陸奥國信夫郡福島(の到岸寺(第五〇冊)などがある。鶴岡靜夫氏によれば關東寺院には行基傳説が充滿している⁽³³⁾とのであるが、恐らく他の地域についても同様のことが云えよう。このことはつまり、民間佛教の開拓者が行基であるという通念が民間には傳統的に流れており、かかる意識をもった聖が全國に充滿していたことを示している。このようなことが淨土宗寺院の開創傳承にかなり明確な形をとつて残っているのである。行基開創の史實の追究はこの場合無意味であり、われわれはかかる傳承が生まれ、維持されてきた背景を問題としなければならないが、このような意味で『舊詞』の諸傳承は多くの示唆を與えている。

五

以上、淨土宗寺院の成立と回國行脚の聖との關係について種々の面から考察を加えてきたが、さらに進んで彼らが定着した民間で念佛がいかなる機能をもつていたかをみておきたい。

「年代綿邈未知往昔何宗何師之所開也、近代或台徒或禪侶混淆成住持」(第四八冊、長源寺條)と伝えられるような無宗派的な狀態からその寺院が淨土宗化していく過程で、いかに多くのひじりの行脚僧が活躍していたかは既にみてきた通りであるが、これらの行脚僧のいかな

る宗教的實踐を機縁として寺庵・傳などが寺宗寺院化したかと云えば、「一向專修之念佛修行終爲淨土之寺」(第四二冊、源福寺條)といわれるように、それは當然のことながら一向專修の念佛修行であつたが、とりわけ受戒念佛・不斷念佛・別時念佛・常念佛などの興行が淨土宗寺院化の一證左となつていた。ではこれらの念佛はどのような性格をもつものとして民間に受容されたであらうか。その念佛は淨土宗的行儀をとりながらも疫癘を除き、死靈を鎮め、亡者を供養するためのものであつた。

(27) 無量寺(信濃國上田領塩田庄手塚村)

當寺起立之始者傳聞、弘治元年之比當村中入疫癘込老若落命不知其數、然清蓮社淨參上人岌泉和尚(中略)斯僧當國通松本于貶當所有遁世者徹秀結草庵閑居、岌泉與徹秀有少緣故自松本泊歸向之砌寄庵室、鄉内門病惱之由興行一夜別時念佛、寄哉衆徒之疫病悉除、依之其比之地頭福澤左京進聞其甚妙、往古爲院地以貫高三百五十字分之地爲境内、建立當院則號無量寺令岌泉住職(後略)(第二六冊)

(28) 來迎寺(大和國添上郡)

當寺起立者大和大納言殿之時犯罪之輩殺害之場(中略)天正年中開山吳譽上人於此邊結草庵、晝夜勇猛修行念佛吊彼亡魂給、奇瑞在之申傳也(後略)(第六冊)

別時念佛も勇猛の念佛も疫癘を除き、罪人の亡魂を弔わんがためであつた。亡魂追福は念佛の大きな機能であり、七日七夜の別時念佛もこの機能を果さんがためのものであつたことは次の資料によつても明らかである。

(29) 大樹寺（三河國）

文明七乙未歲大檀那松平左京亮親忠法名大胤西忠御建立也、當時應仁元丁亥歲品野大將伊保三宅加賀守衣野中將出羽守與松平左京亮親忠及合戰、是云井田野合戰今改井田野云靈場也、從其九年過當文明七年應仁元年討死亡魂晝夜鯨波聲響貴賤恐懼止往還、近鄉近里村大疫靈嘯士民死屍滿巷、依茲親忠公遂奏聞建立一字號成道山松安院大樹寺令寄附三尊之彌陀同國嶋田村西光寺住僧眞蓮社勢譽愚底請待爲開山、爲右之亡魂追福七日七夜別時念佛被仰付令執行、功畢疫靈悉除鯨波聲止畢亡魂塚于今在之、親忠公感念佛威力從此時御師檀御契約淨土宗御歸依深（中略）爾以來每年十月九日諸末山集會大衆一同七日七夜別時于今相勤也（中略）開山眞蓮社勢譽愚底善公洛陽生也、姓氏不知幼少厭俗網下關東、下總國飯沼弘經寺二代了曉上人爲師受戒附法也、自然隱遁志深回國而念佛勸化シ玉フ（後略）（第十六冊）

戰國時代は疫癘、飢饉、戰亂が相次ぎ人々は疫神の退散や浮遊する死靈の鎮送に眞劍たらざるを得なかつたが、念佛はかかる社會的背景をもつて民間に普及し、今に民俗儀禮として傳えられている。淨土宗儀禮たる別時念佛等の形がとられたにせよ、その念佛は資料(29)のように疫癘の熄滅や(29)のように戰死者の浮遊靈の慰撫に資せんがためであり、この念佛に寄せられた期待は空也、一遍、時宗の徒の例を引き出すまでもなく、念佛が民間に出現して以來一貫したものであつた。堀一郎氏は民間信仰に於ける鎮送呪術と民間念佛の機能を明らかにされ、百萬遍念佛、踊念佛などの習俗がもつ意味を述べられたし、⁽³⁴⁾五來重氏も民俗的念佛を鎮魂呪術的念佛、農耕儀禮的念佛、民俗藝能

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖（ひじり）の定着について

的念佛の三形態に分類し、鎮魂念佛の場合道俗の大衆が多數參加して念佛を合唱する融通念佛以來の大念佛形式がとられていることを指摘されたが、⁽³⁵⁾『舊詞』にある大和忍海郡中原邑阿彌陀寺の「元龜三年再興、道俗集會修大念佛也、本尊三尺之石佛ヲ今成中尊也」^(第七冊)の記事は、この觀點から注目せられる。佛教大學民間念佛研究會の調査でも大念佛とその系統に屬する念佛が種々報告されているが、遠州大念佛の起源について資料(29)と軌を一にした傳説がある。即ち一説に、元龜三年の三方ヶ原合戰の際犀ヶ崖において戰死した甲州勢の亡靈が天正二年五月哭聲鳴動し、惡疫を流行せしめ行路の人々に難を加えたので、家康が貞譽了傳（一説に門弟の宗圓、又は法觀）に命じて七日七夜の別時念佛を修せしめたところ、その功德によつて怨靈による被害が鎮まつたといひ、他の説は『彈誓上人繪詞傳』に出るもので「甲斐信玄公合戰の節數萬の軍兵此里堀江に沈み死し」「その亡靈雨夜ごとに光り渡り聲を揚げ野山に鯨波を作る」のを彈誓上人が「箇様に念佛を修しなば再び出まじ」と示されたのに始まるという。⁽³⁶⁾彈誓は山林修行主義の苦修練行の聖であつた。⁽³⁷⁾

以上のように、鎮魂の念佛は苦修練行や回國によつて驗力をもつと信じられた念佛聖によつて行なわれたが、大樹寺や遠州念佛の所傳はこのような聖のもつ社會的機能が傳説化されたものとみてよいし、村々でかかる聖が好んで迎えられたのは、村人が動亂の世を體驗し、その記憶も新らたであつたからであり、死靈が浮遊する戰國時代には聖が里巷に溢れていたといつてもよい。

また豆州志太郡小川村の敦念寺には「小川村依疾疫災人民悉死、今

師（開山長蓮社觀誓祐上人）聞之、此所來死骨集之爲基建骨堂、依教令念佛之文號教念寺」（第十八冊）との所傳があるが、この開山の行業は正しく聖のそれである。

念佛の機能は戰死者等の浮遊靈に對してだけあるのではない。より基本的にはひろく有縁無縁の亡者への追善回向にあつた。伊勢飯野郡射和村の蓮華精舎寺には開山花譽蓮阿彌の「當村之前亡後滅精靈乃至法界衆生一蓮託生同證佛果令廻向也」との記録があつたという（第十四冊）。また奥州磐手郡盛岡の吉祥寺の開山清譽淨念法師は「萬治年中執行一千日法界無縁念佛」したという（第四九冊）。さらに聖の念佛は墓所念佛ともなつて現われていた。泉州泉州郡忠岡村の勝基寺の開山萬譽勝基は、毎夜鉦鼓を打つて泉州五ヶ所の惣墓を回向したとて

(30) 勝基寺

右之寺山號院號無之、開基天文年中（略）開山萬譽勝基上人出生泉州日根野郡樽井村ト云所之人也（略）樽井村之中堂山ト云所有之、此地長老山南泉寺ト云ヲ開基其境內勢至堂虛空堂二ヶ所開基之地住持ス、勝基寺開基ト前後具不知、南泉寺只今者眞言宗ニテ何時眞言宗成候モ不知、泉州之中五ヶ所之墓有之、此墓所爲廻向自鉦鼓打毎夜相廻リ一代無懈怠相勤、依之唯今至在々之者麥米兩度之出來初尾勝基寺ヨリ住持取廻、永祿十二年六月二十六日遷化行年不知（後略）

（第九冊）

と『舊詞』は書き留めてゐる。また同じく泉州下條大津村地藏堂でも左のように墓所念佛が行なわれていた。

(31) 地藏堂

右者拾一ヶ村之墓所、念佛執行之地也、開基天正十九年辛卯開山善正師匠素姓等不知（後略）（第九冊）

(30)の勝基や(31)の善正は墓所にいる聖で、『淨土三國佛祖傳集』のいう「三昧衆」である。地藏堂などは明らかに墓堂であり、聖の墓堂への止住とともに、墓堂の淨土宗化がおきてくる。奈良縣下には墓寺としての淨土宗寺院の多いことが、原田敏明氏によつて指摘されていることを既に述べた。道心や阿彌僧またはこれに類する下級僧が死者追善の念佛を以て墓堂に定着し、この念佛を「常念佛」「不斷念佛」とみることによつて、淨土宗寺院化がはじまる。(31)の善正の墓所での念佛も『舊詞』によれば「常念佛」として理解されている。

かく念佛聖は、その念佛のはたらきの故に、墓地とも結びつき、墓地あつての寺すなわち墓寺が成立するのである。會津の稱名寺は墓所の念佛堂が大きくなつたものである。即ち

(32) 稱名寺

稱名寺者在于會津城東天寧寺南、元法林寺之葬地也、法林開山崇阿弟子教譽傳悅慶長四年建念佛堂成一寺、法林寺之末寺也。（後略）

（第四八冊）

淨土宗法林寺の葬地に法林寺開山の弟子が念佛堂を建て、法林寺の末寺となつてゐるわけで、(30)の勝基寺とともに墓と密着した寺院の成立事情を知る手がかりとなる。

和州忍海一郡の「淨土宗之惣菩提寺」であつた同郡平岡邑の極樂寺については次のような開創傳承がのこされている

(33) 極樂寺

開基行基菩薩之由來元亨釋書十四之卷爲見、行基四十九ヶ所之隨一而往昔之境內者恢廓廣大也、然處經於數百年後楠氏赤松等之兵亂既令殿堂於燒失(中略)于時増上寺所化因名釋之誓念(演蓮社天誓)(中略)慕菩薩行基之舊跡、一百餘回己前造立之石塔於今數多寺中有之者也、建立殿堂慶年中委細不知月日等、蓋是當院成蓮宗之精舎始化道俗貴賤宛如草靡草葉之風既成中興、近邊城主等之石塔於今有當寺(中略)凡成當忍海一郡淨土宗之惣菩提寺(中略)然天譽當寺住職數曆之後轉住地他國而入寂亦不知月日等、蓋寺門前行基開基之處則廿五三昧之隨一歟(中略)本堂之中尊坐彌陀三尺之靈佛開山行基之眞作也。(後略)(第七冊)

この極樂寺は規模の大きい墓寺であるが、ここでも中興はひじりの念佛僧であり、行基傳説を有しているのが注目せられる。このような例は他にも『舊詞』から挙げられるが、こゝでは大和國高市郡市尾村の如來寺が「弘法大師御草創二十五三昧隨一之墓寺也」と伝えられていたことだけを挙げるにとどめたい。

上述の如く、淨土宗儀禮たる別時念佛なども村人の理解と念佛の機能に徴するならば、民間念佛共通の鎮魂呪術的なものであつた。丹後國府の大乗寺で催される講接會は、恵心僧都の始修になるという迎講の流れをくむもので、江戸時代に入つてから復活されたが、この講接會に關して次のような云い傳えがあつた。

64 大乗寺

(前略)開山者利生聖人ト申諸國遊行シ念佛勸進ノ聖也(略)中興者寛印供奉申ナリ(中略)寛弘八辛亥曆始華佛日當山入寺シ而衆生化益

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖(ひじり)の定着について

ノタメニ恵心先德叡山華台院ニテ來迎講接會ノ儀式執リ行シ玉フヲ傳來リ、則國麻鉢立山道場移シ三月十五日ニ毎年是ヲ行イ給ニ一ノ不思議アリ、遠國近國ノ人々或ハ親ニ送レ子ニ離レ或ハ夫トニ送レ妻ニ離、諸共ニ歎キ悲ムニ亡者靈共夢中ニ告テ云、我ヲ訪イ助ント思イナハ丹後國府鉢立山ノ來迎講接會ハ參ルヘシ、日本國ノ諸精靈集リ、各々利益ニ預リ、其ノ記ニハ一村雨降ルト云ヘリ、至極大乘教法攝物利生來迎講接會ヲ執リ行イシ遺跡ナル故大乘寺ト號ス(中略)爰ニ豫久美本願寺ヨリ十五年以前天和二壬戌歲極月八日當寺移リ勤ルト雖供佛施僧檀越モ無キ故ニ分衛托鉢并佛餉領請イ資糧トシテ次癸亥年二月彼岸宿日ヨリ常念佛ニ開闢シ奉リ、再開山利生功中興寛印ノ殘燈迎講接會ノ先跡ヲ追テ毎年三月十五日講接會ヲ行イ春者也(後略)(第二九冊)

鎌倉初期に成立した『古事談』に寛印法印が恵心僧都の始めた迎講を丹後に移し、天の橋立で毎年三月十五日に行つたということが出てゐるし、迎講を丹後で行なつたことについては既に『今昔物語集』(卷十五)やまた『沙石集』(卷十)にみえてゐるので、この地の迎講の話は早くから成立していたとみられるが、往生行としての迎講が死者との出會いの場というように變化している点に、民間における迎講の受容がどのようなものであつたかを示していきわめて興味深いものがある。と同時に淨土宗侶がこの淨土教儀禮を復活させたことに、民間信仰の根強さを感じるとともに、淨土宗の信仰もまたこの死靈・祖靈の鎮魂乃至追慕をその奥に持つ念佛信仰を離れては民間に定着し得なかつたであろうことが察せられるのである。

六

寺院の開創傳承に、古くからの聖の傳統と特色を身につけた教化者がいかに多く登場するかは今までみてきた通りであるが、宗史上の著名な僧侶にあつても聖の世界に身をまかせ、またその故にこそ多大の歸依を受けたものが居た。問題の時期に該當する人物を若干擧げてみよう。

安藝宮島の光明院開山・以八(一五三二)は、「永く師席を辭し、舊里をはなれて抖擻行脚の身とな」り、「東西を遊行し、南北にへんれきし、或ときはつぶねとなり、あるときはかたいとなつて密修暗練すること、あたかも玄寶・増賀のごとく」であつた。⁽³⁸⁾そして、この以八の徳を慕つた厭求(一七三三)も「一生の行履、寺院を領せず、灑々落々として水雲の境界」にあり「長行を修せん」よりは頭蛇を行じて、草庵に念佛せんという心境にあつた。⁽³⁹⁾

右の厭求と道交のあつた無能(一六八三)は「若世上にまじらひ、此身を立んと思はば事にふれて心中の希望たゆることあるべからず、ひたすら俗念のみ深くて心行は日夜に疎かになりもてゆかんは一定なり、しかじ非人法師の身となりて稱名の數遍を策まんにはど、かく年ごろ思ひめぐらして永く此世を捨」ててゐる。⁽⁴⁰⁾

また『舊詞』で松林寺(佐州雜太、郎牛込村)、法國寺(武州都築、郡鴨居村)、光國寺(甲州八代、郡下野村)阿彌陀寺(同國甲府郡、戸野上村)、阿彌陀寺(同國巨摩、郡荊澤村)、阿彌陀寺(相州足柄下、郡塔澤村)などの開山で、彈誓阿彌陀佛とか彈誓道心又は彈誓比丘といわれた彈誓(一五七三)は、「衣物は布木綿紙子に過ず、食物は抹香に松の甘皮を

合せて石臼にて搗、是を丸となし」たもので、「亂髮下り垂て甚だ異相」の苦修練行の聖であつた。⁽⁴¹⁾彼は山林修行主義であり、美濃武儀郡山中、佐渡檀特山、相摸塔峯などに籠山した。

このように彼等の行業は、回國修行聖の、あるいは山林修行聖の傳統を繼承していた。そしてこの傳統は、自づからのべているように「十六部」と成り⁽⁴²⁾、粗衣粗食を貫き、その念佛は苦行主義ともみられる程勇猛であつた關通(一六九六)宗戒兩脉の稟受も障礙なく成して後、ひたすら名利の榮信をいとひ(略)やがて衆僧の交をさけ學席を辭して」諸國行脚に出た學信(一七二四)などに受けつがれた。以上の僧たちは宗史上捨世派とよばれる「捨世」の聖であるが、彼等が身を投じた聖の世界には、繰り返してきたが如き回國修行の聖が傳承の上だけではなく、實際に無名ながら數多く存在していたのである。

戰國の動亂に終止符が打たれやがで社會が安定するに従つて、聖を輩出させていた原因の一つである村の荒廢や敗殘ということがここに消滅したので、それに應じて聖の全體的な數も減少し、殘つたものも徳川政權が封建體制を強化するにつれ、村落支配や宗團統制の面から歡迎されない身となり、或は賤民化して村落に定着するか、寺庵に入つて教團の末端に吸收されるかして、次第に姿を消していくのである。

もともと戰國大名は領國統制上、他國から流入する漂泊者については警戒的であつた。例えば大内氏の文明十八年四月二十九日の禁制に

一、夜中大道往來之事

一、薦僧、放下、猿引事、可_レ拂_二當所并近里_一事

一、非職人、非_二諸人之被官者_一、他國之仁、於_二當所不_レ可_二寄宿_一事

一、路頭夜念佛停止事

一、巡禮者、當所之逗留可⁽⁴⁵⁾爲^レ五ヶ日、過^レ五ヶ日者、不^レ可^レ許容^二事

とあるし、相良氏が出した天文廿四年二月七日の法度には

一、他方より來り候するはふり、山ふし、物しり、やとをかすへか

らす候、祈念等あつらへへからず、一向宗もとひたるへく候

と出ている。⁽⁴⁶⁾念佛聖もひろい意味での漂泊者であるから、放縱な行動は許されなかつたが、大内氏の禁制にあるように巡禮などはむしろどまることの方が困難で、行脚の日々をつづけなければならなかつたのである。中世には治病・除災などで聖の來訪を期待する人々が多かつたので、一定の條件づきで分國徘徊が許されている所があつた。例えば武田氏の場合である。天文十六年六月に定められた甲州法度に

一、禰宜・山伏等事、不^レ可^レ憑^二主人、若背^二此旨^一者、分國徘徊

可^レ停^二止^一

と出ている。⁽⁴⁷⁾行脚漂泊の宗教者が分國法にどのように出ているかをみると、結城氏新法度には

一、兵糧うりかふ様躰聞候ニ、はかり候もの共すいニますめなし候^(隨意)

と聞及候、言語道斷曲事ニ候、御出頭之人めし候共、あんきや^(往來)

わうらい、はちひらきかい候共、たて候ますめ少も不^レ違様ニ^(鉢間)

やく人可^二申付^一候

と、兵糧賣買に關連して漂泊宗教者のことが出ている。⁽⁴⁸⁾また文祿五年の長宗我部氏掟書には⁽⁴⁹⁾

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖(ひじり)の定着について

一、男留守之時、其家江座頭、商人、舞々、猿樂、猿遣、諸勸進此

類、或雖^レ爲^二親類^一男一切立入停止也(下略)

とある。それぞれの事情から法度として出された條項であるが、これらによつてどの領國でも行脚、勸進などの宗教者が往來し、注目されていたことが知られる。

徳川時代に入ると、かかる宗教者の徘徊は、幕府の人身掌握という點から、かなりの制約を受けることになつた。さきにもべたが中世の遊行宗教者は近世には道心者となつて、教團の下部組織に組み入れられると共に、村方の支配をも受けるようになった。

松本藩松川組大庄屋清水家文書の中に、少し時代は降るが、大庄屋の職務のうち宗門改關係の書式凡例とでもいうべきものが残されているが、それには

差上申一札事

(前略)

一、道心者之儀自然差置候とも、生國住所承届宗門相改、本寺又ハ一家共方御法度之宗門ニテ無御座段證文取差置可申候、勿論庄屋組頭方よりも一札差上可申事

(中略)

一、往來之道筋旅人一宿貸申儀兼て被仰付候通彌以堅相守可申事

附、他所る來候不慥成道心者一切在々ニ差置申間敷候、惣て僧俗何ものニよらすうさんなる者一夜之宿も貸し申間敷候、見届不申

者ニ候ハハ早々村繼ニテ先々追拂可申候(以下略)

とあつて。⁽⁵⁰⁾道心者は生國住所はもとより宗門も把握され、他所より來

たものについては身元不明確につき一夜の宿も許されず、村繼ぎで追
い拂われたことがわかる。また、道心者廻國の類は「何國にて相果候
共、其所へ葬候様、本寺觸頭、其在所の寺院、或は親類等慥成書付」
を持つてゐるべきで、もし懷中にこの書付があれば、村方としては
「支配の役所へ訴え、在所へ相届に不及」其の所へ取置けばよかつた
のである。⁽⁵¹⁾さらに寺院に對しても、例えば尾州家では享保二年の「寺
院御法度條々」で

一、後住之義、撰相應之僧、可定之、小庵たりといふとも御目見有
之寺院は、契約以前役所へ相達、其上にて可令入院事

附、妻帶之坊舍後住之義、雖爲實子、其用難勤僧は不可令相
續事

(中略)

一、於地子借地、結新庵、立法流、并私に附新號、令改號之儀等、
彌御停止之。但、本寺より於免許は、其趣役所へ可相斷事

一、他國へ相越之義、其趣、達役所、可仕指圖、但、無別條義に
付、住還廿日迄之他行は不及斷事

と制定してゐるように、住職、新造立、他行などについて嚴重な規定
を設けてゐるので、前代のように宗派色のはつきりしない道心者など
が住職になることはもとより、庵を立てることさえ容易ではなくなつ
ていた。

江戸時代の寺院はこのように藩の統制をも受けると共に、また所屬
する宗派からも制御された。淨土宗寺院は元和元年幕府によつて制定
された諸條目に規制されるようになったが、その中に

一、一向無智之道心者等、對三道俗二授三十念二勸男女二與三血脈二、誠
以法賊也、自今以後堅可三停止二事
という條目がある。⁽⁵³⁾また寛文十一年檀林會議の決議によつて發布した
定書の中にも、

一、爲三所化分二對三在家二五重相傳、從古來二停止之義候得共于今猥
免之候、自今以後急度可三申付二事、附、於三在々所々一隱遁之
上人或道心者、對三在家二五重令三相傳二之聞有レ之候、各強可レ
有ニ僉議ニ事

一、在家構ニ佛前二、別時念佛之導師座鋪談義並道心者寮にて不レ可レ
致三說法ニ事
とある。⁽⁵⁴⁾

このような幕府、藩、本山、村方などからの三重、四重もの寺院統
制、僧尼支配が必然的に確たる宗派色をもたなかつた回國の聖を減少
させたのである。回國聖の入寺定着が幕府の宗教統制が進められた時
期とほぼ一致することは既に述べたところがあるが、このことは右の
事情を想起せしめるに十分である。かくて中世の聖は、統治者の人身
支配と聖を激増させた社會的事情―動亂による浮遊死靈鎮魂の必要や
没落荒廢による武士・農民の村落からの遊離など―の消失にともなつ
て、減少、または轉身を餘儀なくされたのである。

念佛聖のうちあるものは淨土宗へ流入して淨土宗侶になつた。私は
かつて近江安土の淨嚴院の古過去帳に讚阿彌陀佛、高阿彌陀佛、智阿
彌實譽などの名がみえ、元和六年頃から阿彌號のものが出てこないと
ころから、この頃に阿彌僧が姿を消し、彼等が淨土宗僧侶に編入され

る時期が到来するのではないかと考え、智阿彌實譽といった法名は淨土宗侶化がおこなわれる過渡期ものとして注目されることを述べたことがある。⁽⁵⁵⁾

また念佛聖のあるものは道心者として堂庵に定着し、あるものは寺院を離れて鉦打、鉢屋、茶筌などの特殊民や念佛藝能者に零落した。今日、神社寺院などに傳承されている念佛踊などの藝能や諸種の民間念佛に比丘人とか新發意と稱する僧形のものが現われるのは、近世では道心者と云われ、さかのばれば中世の遊行聖であつた民間教化者の残留なのである。

では中世的な聖が果していた鎮魂、追善の社會的機能は一體だれが肩代りするのであろうか。つまり常民の宗教心を満たすものはだれかということであるが、これこそ寺院に住む僧侶、つまり宗侶であつた、と私はみている。淨土宗は近世になつてそれまでの教化者教團から制度的教團へと推移したが、前代の教化者が帯びていた社會的機能は、その教化者自身が近世に入つて分化轉身してしまつたが故に、今度は制度的に確定された僧侶、即ち淨土宗侶が肩代りするのが當然であつた。かくて近世の僧侶は葬式、回向を主務としたが、彼らこそ遊行はしなかつたが中世の聖の正統な繼承者とみられるのである。

(昭和四三年七月一六日稿)

註

- (1) 竹田聰洲「近世諸國蓮門精舎の自傳的開創年代とその地域的分布」(『同同志社大學人文學第五六號以下、昭和三十七年三月〜三十九年二月』)。
- (2) 拙稿「近江における淨土宗教團の展開―歴史・地理的考察―」(『佛教論叢第八號、昭和三十五年三月』)。

淨土宗寺院の開創傳承よりみたる聖(ひじり)の定着について

- (3) 竹田前掲論文「近世諸國蓮門精舎の自傳的開創年代とその地域的分布」(『同同志社大學人文學第七十』)。
- (4) 竹田聰洲「蓮門精舎舊詞成立とその史料性格」(『佛教大學研究紀要第四二・三合卷詞號、昭和三十七年十月』)がある。
- (5) 淨全本には収められていない。増上寺本(佛大圖書館藏寫眞版)による。社頭聖については拙稿「中世の社頭聖について―近江の神社資料による―」(『佛教大學研究紀要四七號、昭和四十年三月』)において論じた。
- (6) 藤井学「江戸幕府の宗教統制」(岩波講座『日本歴史』第十一卷所収、昭和三十八年十一月刊)。
- (7) 『鎮西名目問答奮迅鈔』第一(淨土宗全書第十卷、四三二頁以下)。
- (8) 『麻山集』(吉川清「時衆阿彌教團の研究」一八七頁)。
- (9) 拙稿「阿彌陀佛號について―我が國淨土教史研究の一視點―」(『佛教大學研究紀要三五號、昭和三十三年十月』)。
- (10) 滋賀縣蒲生郡安土淨嚴院文書『近江栗太郎志』卷一、五七六頁、大正一五年六月刊)。
- (11) 稻村担元編「武藏史料銘記集」二一五頁(昭和四一年十一月刊)。
- (12) 拙稿「記主念佛」(『佛教大學民間念佛研究會編『民間念佛信仰の研究』所収、昭和四一年二月刊)。
- (13) 吉川清「時衆阿彌教團の研究」一九〇頁(昭和三十一年五月刊)。
- (14) 赤松俊秀「一遍上人の時宗について」(『鎌倉佛教の研究』所収、昭和三年刊)。
- (15) 例えば大橋俊雄「番場時衆のあゆみ」(昭和三十八年十一月刊)。
- (16) 註(2)に同じ。
- (17) 原田敏明「淨土宗の傳播」(『社會と傳承第三號、昭和三二年』)。
- (18) 示西院行事帳のほか示西院代々行事帳も輯録されている。
- (19) 小林計一郎・霜田巖編「松代藩堂宮改帳」九一頁(昭和三十七年七月刊)。
- (20) 同右書八、五六頁。
- (21) 聖聰「淨土三國佛祖傳集」卷下(續淨土宗全集六、三三〇頁)。
- (22)

- (23) 五來重『高野聖』二〇一頁以下（角川新書、昭和四十年五月刊）。
- (24) 堀一郎『我が國民間信仰史の研究』六三四頁以下（昭和二八年十一月刊）。
- (25) 例えは『蔭涼軒日録』文正元年八月十八日條、滋賀縣大津市坂本生源寺鐘銘（大日本金石史附録二七頁）。
- (26) 『近江蒲生郡志』卷七、五四八頁以下（大正十一年二月刊）。
- (27) 香月乘光・伊藤唯眞・千葉乘隆『日本の宗教2』七三頁（昭和三六年八月刊）。
- (28) 常勝寺緣起（『近江栗太郡志』卷五、三二二頁以下）。
- (29) 金井清光『善光寺聖とその語り物』（『時衆文藝研究』所収、「時衆研究」第十九・二一號、（昭和四一年八、十、十二月）。
- (30) 『善光寺緣起』第四（續群書類從第二八輯上、一八五頁以下）。
- (31) 『蓮門精舍舊詞』（第四八冊）新善光寺條下に「當寺塔頭之存亡」として次の如く記載されている。
- 從信州慕如來時衆寺
十念寺 山上本時衆 慶長十二冬二月廿二日住持已後再興 元和六年遷
化已後退轉 香佛
- 三昧寺 川端時衆同炎上已後造營住侶清國 寛永五年五月廿日逝去已後
属傾庵
- 念佛寺 同所住持愛一 天正四年二月十九日遷化 已後泯滅
至誠寺 同所同炎上已後再興住持故一 元和六年正月逝去已後退轉
右四箇寺遺趾寛永九壬申天前大守加藤吏部明成公保有司爲茶店矣
- (32) 拙稿「阿彌陀の聖について―民間淨土教への一視點」（近刊の藤島博士還曆記念論文集所収）。
- (33) 鶴岡靜夫『日本古代佛教史の研究』二二五頁以下（昭和三七年九月刊）。
- (34) 堀著前掲書三九頁以下。
- (35) 五來重『融通念佛・大念佛および六斎念佛』（大谷大學研究年報十號、昭和三二年十二月）。
- (36) 平祐史「遠州大念佛」（佛教大學民間念佛研究會編・前掲書三七五頁）。
- (37) 拙稿「捨世の系譜―近世淨土宗における―」（近世佛教第三卷第二號、昭和三七年十月）。
- (38) 『光明院以八上人行狀記』（淨土宗全書第十七卷、七六六頁以下）。
- (39) 『厭求上人行狀記』（淨土宗全書第十八卷、五五頁以下）。
- (40) 『無能和尚行業記』上（淨土宗全書第十八卷、一一五頁以下）。
- (41) 『彈誓上人繪詞傳』（淨土宗全書第十七卷、六八五頁以下）。
- (42) 『燧囊俚語』卷一（雲介子關通全集第一卷、四一頁以下）。
- (43) 『向誓上人行實』（雲介子關通全集第五卷、一頁以下）。
- (44) 『學信和尚行狀記』（淨土宗全書第十八卷、三〇二頁以下）。
- (45) 『大内氏掟書』（佐藤・池内・百瀬編『中世法制史料集』第三卷六九頁、昭和四十年八月刊）。
- (46) 「相良氏度」（同右書三二頁）。
- (47) 「甲州法度之次第」（同右書二一五頁）。
- (48) 「結城氏新法度」（同右書二五一頁）。
- (49) 「長曾我部氏掟書」（同右書二九一頁）。
- (50) 『近世村落自治史料集』第一輯一二〇頁。
- (51) 『吏事隨筆』「海道筋旅人取扱方之事」（名古屋叢書第三卷一八四頁、昭和三六年二月刊）。
- (52) 『尾州家代々條目』「寺院御法度條々」（前掲書第二卷四五頁）。
- (53) 大島泰信「淨土宗史」（『淨土宗全書』第二十卷、五七八頁）。
- (54) 同右書、五八七頁。
- (55) 註(2)に同じ。